〈書　評〉

エウジェニオ・コセリウ著 柴田武　W・A・グロータース訳 『言語地理学入門』

三宅鴻

翻訳書の書評として述べるべき要件は一般に、原著者はどういう人か、原著はどういう性質のもので日本人が読んでどう有益か、翻訳の態度および成果はどうであるか、この三点であるかと思う。この書評においてもその常道にのっとりたいのではあるが、柴田武、W・A・グロータース両氏によるこの翻訳は、一言でこれを言いあらわせば「自由な意訳」である、と「訳者まえがき」にもあり、さらに訳者あとがきには、「パラグラフ単位の移植」と呼ばれている訳出の実際が、原文をも示して実演されており、共訳者お二人のもっとも意を用いられた面が、すなわち翻訳という作業を通じてしばしば現われがちな日本語としてのある硬さ、わかりにくさをできる限り排除しよう、という所にあったと当然推測される。従って書評子のもっとも関心のある点もここにあるのは自然なことであり、この書評では通常のスタイルに依らず以上の前口上のあと、直ちに本題に入り、訳文そのものを検討し、のちに原著者および原著について紹介いたしたく思う。

コセリウの元来の原本は *La geografia lingüistica* という題のスペイン語本であるというが、この和訳はペーテルゼンによるそのドイツ語訳（*Die Sprachgeographie*）を底本としており、その他にフィンランド語訳もあるという。ドイツ語版は60頁、うち本文51頁、うち言語地図12頁であるというから文章部分は39頁である。通常の馴れた訳者であれば一応3日でこなす量であるが、訳者お二人はこの訳に足かけ4年かけられたという。もっていかに本訳書がやっつけ仕事ではなく、全力を傾けられて「徹底してわかりやすく」、かつ訳者お二人が「いい」（原文のまま、原文に引用符あり）と考えられた日本語に移すために努力されたかがわかる。事実、本当に日本語らしい日本語にし、しかも原文の語気をつたえる訳文を作るのには、いくら時間があっても足りないのであり、書評子などもこれまで、全く時日の制約なしに十分時間のかけられた訳はブルームフィールドだけで、あとは一日のノルマを課してみずから心身を調節しつつ馬車馬のごとくに「移す」作業を行った想いが残る。従って柴田・グ両氏のこの訳書についてだけは、訳者の時間的制約を斟酌することなく、存分に意見を述べても許されそうに思う。一言のみ

おことわりをすれば書評子のドイツ語力は、旧制高校で三年間多少の努力を費しただけで、あとそれをその水準に保つだけの努力さえ行なわずもっぱら英語に没頭して来たため、ことに単語力が著しく落ち、次の段落もなんとか辞書を引いたが、言うまでもなくある原語から日本語に本式に訳すためには、通常の長さの段落中初めてお目にかかる単語がせいぜい一つ、それも前後から大体の意味の見当がついて、そのあとで確かめるために数回辞書のお世話になる、というのが条件である。つまり原文は一読してほぼ意味がわかり、あとはそれをいかに読みやすい日本語にするかに腐心する、ということが訳者に要求される。教室語学で中々教えられないのは、要するにこの文はなにを言っているのか、という肝心の点である。一語一語訳してやらないと生徒・学生は満足しない。そしてお察しのように原本にびっしり単語の「訳」を書き込んで、適宜はめ込みパズルのごとくにそれをつなげる、というのが実状である。従って原文の語気もなにもあったものではない。もしもこの柴田・グ氏訳がその水準を出ているならば、それのみでも建設的に評価されるべきであると思う。

しかし本誌は、かりにも学会誌である。従って教室ていどの水準を上回る水準で評価を行なっても許されると信ずる。あれこれ言う前に、訳者方の示された原文を次に掲げよう。

In der Fachterminologie der heutigen Sprachwissenschaft bezeichnet der Ausdruck "Sprachgeographie" ausschließlich eine dialektologische und vergleichende Methode, die in unserem Jahrhundert—insbesondere auf dem romanischen Gebiet—eine außerordentliche Entwicklung erfahren hat und die entweder die Aufzeichnung einer verhältnismäßig hohen Anzahl durch direkte und einheitliche Befragung in einem Punktenetz auf einem bestimmten Territorium festgestellter sprachlicher (phonischer, lexikalischer oder grammatischer) Formen beinhaltet oder zumindest die Verteilung der einzelnen Formen auf den geographischen Raum berücksichtigt, welcher der untersuchten Sprache bzw. [=beziehungsweise] den untersuchten Sprachen, Dialekten oder Mundarten zukommt.

一読明快の文章である。ひととおりは、旧制高校3年の生徒なら読みこなしたであろう。いま便宜のためわざとこれを、教室において懇切丁寧な教師が、原文をわからせるために用いるであろう方法を用いて、訳読して示す。

「今日の言語学の専門用語では、〝方言地理学〟という名称は、方言学的・比較言語学的な方法をもっぱら指して用いられる。この方法は、今世紀、ことにロマンス語分野において、顕著な発達をとげた方法であり、それは、区域の住民に直接に、かつ一貫した方針で質問を行ない、一定の限られた地域内の地点網において、存在が確認された、言語上の（すなわち音韻的・語彙的・文法的の）形式を、かなり多数項目にわたり記載した結果を含むか、あるいは、少なくとも、調べられている言語ないし方言または郷土語に所属する地理的空間に、個々の形式がどう分布しているかを考慮するものである。」

ここで二・三、外国語教師が習熟しているはずのテクニックについて語る。この原文はずっと読みくだして来てすぐに骨格がわかる

が、entweder… oder の対照を見誤らないこと、ドイツ語（オランダ語も同じ、デンマーク語は違う）特有の、副文における主動詞後置のため、主語（関係代名詞）die を承ける動詞は beinhaltet, berücksichtigt であること、を知ればあとは辞書を用いて一通りの訳文は作れる。die untersuchte Sprache, bzw. die untersuchten Sprachen, … といった表現は単数と複数を区別するたくさんの言語でおそらく必然的に生ずるもので、英語でも a book or (some) books のように言い、要するに「本」ということであって、ここも初歩的には「調査されている言語（単数）、ないしは諸言語・諸方言・諸郷土語」となる。進んだ段階では教室でも、この単複に限り無視することがある。ここで分りにくいのは、空間がその言語に所属する、という表現である。言語が空間に属する、の方が日本語としては分りやすいはずである。「空間」と訳しては不可なのかも知れない。

先ず述べるべきことは、上掲の訳読調の日本語は、このままでは公開できる日本語ではない、ということである。世にはまま、この程度で公開された訳書もあり、また書評子も急ぐと手抜きしてこの程度ですませることもあるが、それはある人の表現を藉りれば「直訳という名の手抜き工事」であり、問題は、この直訳文から、どのぐらい離れたところにみずからの訳文を作り上げるか、という所にある。それは、原作が文学作品であるか（わけても、詩であるか小説であるか芝居であるか）、論説であるか、娯楽読み物であるか、そしてどういう読者を対象にしているか、どういう目標をもっているか、といった数多くの計器をにらみ乍らの、高等技術であって、学校出たての新米にできる芸ではない。いまの段落について言えば、これは全巻の最初に置かれており、西洋現代語の一般の習慣により、最初の段落は全巻の内容を煎じ詰めて言っているから、それを完全に理解するためには、全巻を読み抜かねばならない。ここが東西のかけ橋となるはずの訳文のもっとも苦心する所であって、つまり、日本文の読者はなるべく抵抗なくするりと頭に入る文が劈頭に来れば、これは中々面白そうだ、ひとつ精出して読んでみるか、といざなわれるのであり、一方、西洋文の読者は、冒頭の文章はなるべく知的に challenging であるほど、これは歯ごたえがある、興味をそそられる、と思うものであるからである。出だしのいざなわれ方が東西で異なるから、訳文ではある程度の妥協をしなければならず、本当に日本人に分かりやすくしようと思えば、具体的な例から入るのが常道である。ところがこの文章は、学問の定義から始めている。従ってどのぐらいソフトにそれをうすめて、しかも元の香気を残すかが、訳者の腕前を問われる所である。そのためには、原文がなにを言いたいかを、先ず原文を離れて理解し、次いでそれを再び原文と照合してどう原文を生かすかに意を用いるのが訳文である。そこで、私の理解しうる限り、この原文が何を言いたいかを、私の能力の許す範囲で、ごく砕けた日本語で次に示す。

今日の言語学は大いに進歩して、いくつもの専門分野がその中に分れて生じている。その一つとして、「言語地理学」という分野がある。これは、方言学と比較言語学の両方の成果を応用した方法を用いる（この方法は、今世紀、とくにロマンス諸語の分野で、大いに進歩を見た方法である）。

この方法では住民に質問をする。その質問は間接的でなく直接に相対して行なわれ、かつ一貫した方法による。こうして、あら

かじめきめられた大地域の中の、いくつもの地点の作るネットワークを考え、そのネットワークの中において、言語上で（ということはつまり分けて言えば音韻・語彙・文法となるが）確認された（つまり臨時的な特徴や言いあやまりでない）特徴を、かなり多数にわたって（なんらかの方法で）示すようにする。あるいは、少なくとも、個々の特徴が、その地理的空間（これは調べようとする言語・方言・郷土語に属する空間であるが）に、どう分布しているか、その点を十分考慮するものでなければならない。

さて、おまちかねの柴田・グロータース訳では、これを次のように訳した。

「現代の言語学の用語で『言語地理学』というのは、方言の比較という方法を用いる分野ということができる。「言語地理学」は今世紀、特にロマンス語地域で目ざましい発達をとげた。

その方法について少し説明しよう。まず、一方で、ある地域から調査予定地を選び、一方で、音韻的特徴、語彙的特徴、文法的特徴を含む語がかなり多数調べられるような一定の調査票を用意する。その上で、調査地に足を運び、直接そこの住民から聞き出す。同じことを予定したすべての調査地点についてくり返して材料を集め、その結果を何枚かの地図に書く。こうして、少なくとも一つ一つの語が地理的にどう分布するか、それぞれの分布地域がどういう言語（方言）に属するかを見るのである。」

傍線を引いた部分は、原文になく補った部分であるとして訳者が示した部分であるが、その他にも調査票とか地図とかへの直接の言及は、原文にはない。従って、この部分に対する限り、この訳文は、原文の解説であり、かなり訳述に近い。しかし、共訳として公刊されている以上、あまり嬉しい作業ではないが、原文と照合してその適否を述べざるを得ない。

先ず、目立った誤訳はない。これのみでも、日本の翻訳界一般の現状としては、特筆大書すべきことであろう。原文メトーデのあとの die は、メトーデを受ける関係代名詞としかとりようがないが、そのメトーデ（方法）すなわち言語地理学なのであるから（ここが大切）、これを「言語地理学は」と言い直しても許されよう。問題は、原文に即して言うと、言語地理学とは、もっぱら、……というメトーデ（方法）である、という原文の「もっぱら」(ausschließlich) をことさら省き（この語の分からない人が訳するはずはないから）、かつ、「という方法を用いる分野と言うことができる」と直した点である。この関係代名詞 die は、この eine … Methode を受けるから、この文章はここから末尾まで、このメトーデが主語であり、メトーデが含んだり、メトーデが考慮に入れたりするのが原文である。言語地理学や方言学のような分野ではことに、方法のよしあしと、それを実行する質問調査のよしあしと、それをまとめる製図作業のよしあしと、この三つできまるかと思う（わたくしは専門ではないので違ったらお許しを乞う。）そのメトドロギーを述べた原文は、さきに示したように具体的な調査票とか、地図とかの目に見えるものによって置き代えられている。

eine dialektologische und vergleichende Methode というのは著者の思想の縮約である。これは dialektologisch（副詞）vergleichend（形容詞）という意味かと私は二三の方々にたずね御賛同を得たが、その点は少し厄介であるから棚上げしても、「方言学的」かつ「比較言語学的」(Dialektologie はむろん術語であり、vergleichend

または comparative というのは十九世紀以来、言語学では比較言語学の方法以外はさし得ないと思う、日本語と英語とは比較できず対照研究しうるのみである）な方法が問題だという本文の表現は、学術書である以上そう原文を無視した訳はできないと思う。「方言の比較という方法」という訳は、原文の言わんとする所を正しく伝える、という意味で正しい訳であるか否か。私の持っている乏しい知識によると、方言地理学はじめ、余りに理念化された比較言語学に対するアンチテーゼ（反立）として登場したが、それが発展するに従い、本訳書67頁にあるように、音韻法則を破壊するために言語地理学があるのではなく、この法則を物理的法則（話し手をはなれた独立の生き物の従う法則のようなもの）から、歴史的法則（歴史には当然人間が参与する）に変えることを目指すためにあるのだ、という方向をとって自らの存在証明をしていると思う。原著者がこの本の末尾で述べているように、コセリウ的言語地理学は、これまでの「古い」言語学のすべてを解消し排除するようなひとつの新らしい言語学ではなくて、言語学のなかのひとつの新らしい方法であって、古い方法と融合し、それを修正し、かつ自らをも乗り越えるべきものである、という。このようにして本書は首尾一貫するのであり、故に「方言学的・比較言語学的方法をさす」とは、原著に即した考え方をする限り、これは「言語地理学とは、比較言語学と方言学の二つの学問の長をとり、これを融合してひとつの学問となした方法の謂である」分かりにくければ「のことである」となる。つまり、当代一流の学者である柴田氏が、方法の重要性ということがお分かりにならぬ訳はないから、これはことさらに原著を抜け出て「方言の比較という方法を用いる分野」（分野はドイツ語で Fach）と和らげられたものと解せられる。以下すべてこれに倣う。「少なくとも」地理的空間における分布、と言うときの「少なくとも」が分かるのは専門家である。「言語」「方言」「郷土語」（原文 Mundarten）などの微細な関連が分かるのも専門家である。つまり専門家が見ても文句のつけようのない言い回しで、一般読者にも向けて語ろうとしたのが本書であろう。そうすると、冒頭の「もっぱら」（ausschließlich）というのも、著者の願いを込めた、「それ以外の定義や方法は締め出し（ausschließen）たい（失格させたい）」という立言かも知れない。そうすると、これを「と言うことができる」と訳したのは、日本語を知る訳者たちの名訳なのかも知れないことになる。

わたくしは遺憾ながらドイツ語原著をもたないけれども、本書のすべてにわたって、このような配慮が施されていると信ずべき理由がある。その理由の第一はこの示された冒頭の訳文から訳者の姿勢が十分に窺えること、第二は訳文全体がよみやすいこと、第三に柴田・グ両氏の学的良心に疑問の余地はないことである。むろん人力には限界があり、書評子は初版について所々柴田氏の訂正個所のある一本を所持しているが、これらの訂正個所は来るべき再版において訂正されることと信ずるから、今は公開しない。

かつて松原秀治氏がドーザを訳された（一九三八年）ころと比べ現代では、言語地理学の名称も方言の重要性も言語地図のことも、みなある程度は、少なくとも一般の学者仲間では、常識となったと見なしてよかろう。原著者コセリウは、周知のごとく間口の広い思弁的な面に長ずる学者であるから、本書において読者は、言語学一般における言語地理学（好むならばこれを「専門分野」と称するのも反対はしない）の位置づけという面に興味をもたれるであろう。ルーマニアに生

まれドイツ語にも強い、つまりロマンス語とゲルマン語とに通ずる、博言学者でもある原著者から、言語地理学発展の概要を学ぶことも有意義であるが、言語地理学は元来きわめて実践的な学問でもあるから、私のみならず少なからぬ読者の方々の興味は、本書第8章の「結論、言語地理学的方法の影響と限界」に向けられるであろう。

最も大切と私の思う点は次のことである（訳書98頁）。言語変化は、（なぜかではなく）どのようにして生ずるかというと、結局、ひとりの個人に始まり、社会的・文化的要因により、周囲に伝播するものである。敷衍して言えば、このようにして言語の歴史的・地理的変化というものの根が抑えられる。改新は個人に始まる、という立言は、私の知る限り前世紀のH・パウルに始まり、ソシュールがこれを継承し（クール）、イェスペルセン（『言語』）もこれを唱え（その点でソシュールとイェスペルセンは、見かけほど対立するものではない）、いまコセリウらもこれに従う。この流れに対して他方、前世紀の言語有機体説に始まり、ソシュールの「ラング」なるレアリテないしアンティテ（存在体）説、チョムスキーのコンピテンス説（抽象的言語能力）に至る、時枝誠記なら言語実体説と一括するであろう流れがある。青年文法学派によれば言語変化は機械的盲目的に話手に作用するし、ある言語地理学者によれば単語はそれ自身の歴史を有し旅行するものというが、コセリウは、言語形式は話手から独立に勝手に旅行などするものではなく、人と人との接触によってある個人の言語財が他の個人に採用されるのである、とする。従って、ある地域の言語が一斉にある方向に変化する、ということはないことであり、改新と伝統保持の間に、また個人の言語行動と、歴史をもつ言語共同体の間に、それぞれに働く微妙な相互作用があり、その緊張関係の中で一瞬保たれる平衡状態が一言語の個性を決定する、と著者は述べる。この点でも、原著者コセリウが、パウルおよびソシュールの学統を守り、ついでそれを現代に生かした、ひとつの正統を継ぐ学者であることが分かる。言うまでもなくもう一つの正統は、ソシュールの他の一面から発してブルームフィールドからチョムスキーへと流れるもので、現在のところいずれが本流であるか、見分けのつかないことは諸賢ご明察の通りである（両者の対立を融和せしめるひとつの鍵を、私はサピアに求めるのであるが、今は語るを控える）。いずれにせよコセリウの、ひとことで言えば人間学的態度は、私には好感をもたしめるが、人によってはおのずから反対を唱える人もあろう。

最後になったがコセリウはルーマニア生まれでエウジェニオ・コセリウ、一九二一年生、現在西独テュービンゲン大学正教授、ロマンス言語学会会長と聞く。日本ではこの数年来にわかに注目を集め、三修社は精力的にその著の出版をしている。その用語 norma を規範とするか慣用とするか、いまは論じない。コセリウが「時間」という因子についてどう考えているかは、亀井孝氏の紹介もあり、ここでは伏せる。柴田武、W・A・グロータース両氏については、紹介の要なしと思う。お二人が「誤訳指摘」という面でなさっておられるお仕事は、大体を言えば、日本の文化にとって有益と信じ、ここではそれ以上あげつらわないこととする。柴田氏とグロータース氏の日本語の語感は、驚くべきものであることを、私は知っている。

（昭和五十六年八月二十日発行　三修社刊　B6判　一四〇頁　二〇〇〇円）

——法政大学教授——